

趣 旨 説 明

坂 口 俊 哉*

スポーツを通じて地域振興しようというのは、決して新しい切り口ではありませんが、2020年の東京オリンピック開催が決定してから、かなりいろいろな動きが中央省庁をはじめいろいろなところで起こっているということです。スポーツ庁に関していうと、スポーツによって地域の経済を活性化しようということをやっています。

鹿屋体育大学では昨年度からCASE（Community Activation through Sporting Events）プロジェクトというものを始めてまして、スポーツイベントなどを通じた地域活性化に関する研究プロジェクトを実施しています。生涯スポーツ実践センターでは自転車のイベントであるツール・ド・おおすみを対象とした研究プロジェクトを実施しています。

今日のテーマはスポーツツーリズムということですが、スポーツツーリズムといえばということで、よく成功例に挙げられるものがあります。ニセコの例がよく取り上げられます。多分ご存じだと思います。ニセコといえば別の言い方をすると、私の立場ではパウダースノー・ジャンキーの聖地であると、皆さんも多分そういう報道のされ方でご存じではないかと思えます。ニセコといえばそういうところですが、雪を求めて廃業したスキー場へハイクアップするような、少し特殊な嗜好を持っている人たちが集まる過程でどんどん大きくなっていったような背景もあります。

ニセコは日本のスキーリゾートの先進地であるというような言い方もできるかもしれません。新聞などの報道を見ますと、例えば地価の上昇であるとか、あるいは富裕層の取り込み、海外資本の流入であるとかあるいは夏も冬も楽しめるアウトドアスポーツの基地であるというような取り上げられ方をしています。

そういった成功を成し遂げるために、何があったか、こんな要素が挙げられるかと思えます。雪がある、そして食がある、温泉がある、さらに近年ではナイトライフ、夜を楽しめるような施設やサービスがあるということが挙げられています。

ただ、よく考えてみると、私は北海道出身ですが、30年前にもこういうピースはありました。そのピースをどうやって組み立てるかというところで工夫した結果が、今のニセコの成功を生んでいるのではないかと、私は考えています。

××は日本のスポーツツーリズムのメッカあるいは聖地あるいは先進地であるというこの××の部分に、今日いらした皆さん、ご自身の住んでいる市であるとかを入れてみてどうですか。いえそうだという方はいらっしゃるかもしれません。残念ながら私、鹿児島の中でそういう市町村があるとは認識していません。鹿屋市であったとしてもいえないかなというのが現状だと思います。では、それを大隅半島あるいは鹿児島県というくくりでいったらどうでしょう。可能性があるのではないかと私は思っています。



今日の会議の趣旨ですけれども、どのくらいピースが集まればいいのか、あるいは今どのぐらいパズルのピースがそろっているのか、あるいはそのピースをどういうふうにしてはめていけば、ツーリズムの基地になるのか、そしてそういったパズルをはめていくプレーヤーは誰なのか、役割はそれぞれどういうことがあるのかというようなことを、皆さんと確認できればこの会議は成功なのではないかと思っています。

今あるピースを、私はぱっと見てみました。例えばユクサおおすみが最近オープンしたり、道の駅たるみ

* 鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター

ずはまびらが開業したりしました。それから、今日もお話していただきますけども地域連携 DMO として未来会議が立ち上がったたり、自転車のまち、鹿屋の取り組みというものもあります。そして、鹿児島では何よりもホットな話題ですけれども、国体に向けた施設整備ということもスポーツツーリズムを支えるピースだと思います。

そして、パズルのピースとして考えたときに NIFS、鹿屋体育大学にいったいどんなものがあるのか。パフォーマンス研究センターであったり、Blue Winds であったり UNIVAS というようなものが今動いています。そしてこれを、今年の2月15日に開催される予定の、日本スポーツツーリズム振興のための社団法人、JSTA の会議がありますが、そちらでも大学スポーツを利用してどうやって地域を活性化していくかという取り組みがもう注目されている状況です。ですので、この会議を通じて鹿屋体育大学が地域の振興にどうやって携わっていけるのかというようなことで何かヒントをいただければと考えています。

本日の講演は、二宮先生に最初にお話していただいたあとに、事例を3件報告していただきますので、いろいろなピースが見つければと考えています。よろしくお願いします。